

日本中世国家周縁地域史の研究

著者	?原 敏昭
号	21
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文第252号
URL	http://hdl.handle.net/10097/59354

やなぎ はら とし あき
柳 原 敏 昭

学 位 の 種 類 博 士 (文 学)
学 位 記 番 号 文 第 252 号
学 位 授 与 年 月 日 平成21年 5 月14日
学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 4 条第 2 項該当

学 位 論 文 題 目 日本中世国家周縁地域史の研究

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 今 泉 隆 雄 教 授 大 藤 修
教 授 佐 藤 弘 夫

論 文 内 容 の 要 旨

1. 研究対象

本研究は、中世前期（平安時代後半～鎌倉時代）の鹿児島県万之瀬川下流地域を対象とする地域史研究である。当該地域は、薩摩半島南西部に位置し、東シナ海に面する。薩摩地方では川内平野に次ぐ広さの沖積低地が形成され、海岸部には吹上浜と呼ばれる砂丘が続く。現在の行政区分は、南さつま市であり（2005年11月～）、万之瀬川の右岸が金峰町、左岸が加世田である。古代・中世には阿多郡に属し、やがて加世田別府が分出した。金峰町が阿多郡、加世田が加世田別府にあたる。「外浜から鬼界島まで」といわれた中世日本国の南（「西」）の境界＝鬼界島（薩南諸島）にほど近く、国家周縁地域と位置づけられる。本研究の表題を「日本中世国家周縁地域史の研究」とした所以である。

*周知のように、中世の方位観と現在のそれとは異なっている。中世の日本国の四至は概ね、東＝津軽外浜、西＝鬼界島、南＝土佐、北＝佐渡である。以下、中世の方位観を示す場合には、「東」のように括弧付きで表すこととする。

万之瀬川下流地域は、原始以来、南九州の一つの中心であり、また、南西諸島から北九州にいたる海の道の重要拠点でもあった。中世の万之瀬川河口部にも港があり、地域内の遺跡からの出土品を見ると海外、とりわけ中国（宋）との関係が考えられる。また、日本列島各地から人・物が流入していた徴証がある。万之瀬川下流地域は、南九州全域、九州島、列島各地、さらには中国とも関係をもち、歴史を紡いでいたのである。これは前述した国家の周縁という歴史的位置とかがわっていた可能性が高い。周縁とは、中心に対置されることばであり、中央に対する辺境と言い換えることもできる。日本国という枠組みを前提とすれば、万之瀬川下流地域は紛れもなく周縁であり、辺境である。しかし、周縁は、後進と同じ意味ではない。また、国家の枠組みを相対化すれば、行き止まりではなく、日本国とは別の世

界—南西諸島や中国大陸等々—が間近に開けている場所ということもできる。論題の「周縁」にはかかる含意があることを強調しておきたい。

2. 研究史整理

次に研究史の整理を行い、本研究の位置づけを明確にしておく。本研究にかかわりをもつ分野としては、次のものが考えられる。

- ①中世前期の南九州史研究／②中世万之瀬川下流地域の研究／③中世海上交通史研究、港町研究／
④対外交流史、とりわけ日宋貿易史の研究

さらに本研究を遂行する上で、常に念頭に置き、意識していたのは、1980年代後半から北海道・東北地方を中心に進められてきた、いわゆる「北からの日本史」、「北方史研究」であった。端的に言えば「南からの中世史」というものを構築できないかという思いであり、また、中世日本国の南と北とを比較するという問題意識である。

そこで、ここでは「北からの日本史」を意識しつつ、南九州や万之瀬川下流地域の研究（上記課題①②）がどのような歩みを重ねてきたかについて、中世前期の研究を中心に概括的に述べる。

(1) 中世東北史研究と九州史研究

中世前期東北地域史の研究は、a 東北開拓史観（戦前～1950年代）→b 東北自立論（1960年代～）→c 国家の中の東北地域論（1970年代半ば～）→d 東北・東アジアの中の東北地域論（1980年代半ば～）というように推移してきたと整理できる。

a「東北開拓史観」は、東北という地域を未開・辺境の地ないしは中央政府の開拓の対象となった地域ととらえ、その後の歴史の展開を中央とのかかわりを軸として理解する考え方である。それに対して、高橋富雄氏の研究に代表されるb「東北自立論」は、中央の政治支配者の視点からではなく征服される側から歴史を見ようとする視点を打ち出した点、また、地域社会の内部に目を向け、その独自の発展過程を追究するようになった点で、研究史に大きな転換をもたらすものとなった。さらにc「国家の中の東北地域論」は、bが東北からの視点を押し出すあまり、東北の独自性・自立性を強調しすぎる難点があることを批判し、民衆を視野に入れつつ、安倍・清原氏や藤原氏が蝦夷支配を国家から委任された存在であったという面を重視する議論である。ただし、大石氏が述べるように、国家支配という側面と地域の自立という側面のいずれに重点をおくかは、現在においても論点となっている。この段階で、東北＝辺境＝行き止まりではなく、東北の先に北海道（蝦夷島）が存在することが認識されはじめていることにも注意を向ける必要がある。

dの「東北・東アジアの中の東北論」は、国家の枠組をいったん相対化した上で、視野を東北アジア全体にまで広げることで、新たな東北地域史像を描こうとする研究動向といえる。また、平泉および藤原氏研究に代表されるように、考古学と文献史学の共同が本格的に進むのもこの段階からとなる。

一方、九州地域の研究はどのように進展したのだろうか。

いうまでもなく九州、ことにその南部は、古代において律令国家に編入されるのが遅れ、隼人が存在し、その後も辺境・後進地という見方がなされてきてきた。東北地方と類似の位置づけであったといえる。

これに対して、やはり地域からの視点を対置する研究があらわれる。東北地域史でいえば、bに相当する問題意識といえる。ついで中世の九州地域には、蝦夷に対するような国家の異民族支配という問題が存在しないので、東北地域史のcのような段階は明確には存在せず、dの段階に相当する段階が訪れる。1980年代半ばの還東シナ海地域論の提起である。九州の先には、琉球・朝鮮・中国があるというこ

とを自覚し、国家の枠組みを相対化しつつ、東シナ海に面した広い地域の一部として九州を考えると
いう視点である。

以上はごく大雑把な整理であるが、東北と九州の中世史研究が、似たような軌跡をたどってきたこと
が理解されると思う。そして、現段階においては、次のような視点が重視されるべきであるとする。
(ア) 中央中心史観に立たず、地域の主体性を重視する。(イ) 地域内にも対立があることを考慮し、中
央と地方という二項対立で考えない。(ウ) 辺境性を相対化し、むしろ異なった世界の間をつなぐ位置
にあることを重視する。(エ) 国家の枠組みを軽視せず、しかし相対化する視点をもつ。(オ) 東アジア
世界の拡がりのなかで地域を考える。

(2) 「南からの日本史」

問題は、上のような視点に立った研究がどこまで進展しているかである。ここからは中世前期南九州
の研究に限定して述べる。

当該分野の研究は、五味克夫氏による史料発掘に基づく基礎的研究をはじめとして、島津荘を中心と
する荘園公領制研究、土地制度史研究、御家人制研究など多様な視点から行われてきた。

一方、「北からの日本史」の領導者の一人であった大石直正氏は、「外が浜・夷島考」(関晃先生古希
記念会編『日本古代史研究』吉川弘文館、1980年)の中で、日本中世国家の「西」の境界についても論
及した。また、村井章介氏は「日本列島の地域空間と国家」(同『アジアのなかの中世日本』1988年。
初出1985年)を著し、「浄一穢」の構造論を空間的に適用し、中世人の列島認識のモデルを示した。
1990年代、これらの影響を受けて、「南からの中世史」ともいうべき新しい視点に立った南九州中世史
研究が開始される(永山修一「キカイガシマ・イオウガシマ考」『日本律令制論集』下、吉川弘文館、
1993年など)。

こうした最中の1996年、鹿児島県金峰町の持躰松遺跡^{もったいまつ}の発掘調査で大きな成果があがった。従来から
海上交通の拠点と目され、また政治的にも重要視されていた万之瀬川下流地域で、12・13世紀の輸入陶
磁器を中心とする多量の出土遺物を伴う遺跡が発見されたのである。海外との関係もクローズアップさ
れることとなった。

この遺跡は、ちょうど「北からの日本史」における平泉柳之御所遺跡や十三湊遺跡と同じような役割
を果たしたといえるだろう。考古学と文献史学、相い乗りいれての議論が行われるとともに、遺跡のあ
る地域の具体的研究の深まりが、南九州中世史の再検討を促すような状況を生んだのである。

また、村井章介「日本列島の地域空間と国家」(前掲)は、中世前期の南(「西」)の境界領域に関す
る方法的自覚に基づいた個別実証研究がほとんどない中で著されている。この地域の具体的検討が進み
つつあるいま、一層高い地点から南(「西」と北(「東」)の双方を視野に入れた研究が可能になっている。

3. 本研究の成果

2で整理したような研究史を踏まえ、本研究では次のような課題を設定した。

- ① 持躰松遺跡の発掘等、考古学の成果を受け止め、文献史学の立場から万之瀬川下流地域の様相を
具体的に描き出す。
- ② 万之瀬川下流地域と領主権力、国家権力掌握者との関係を再検討する。
- ③ 万之瀬川下流地域と南九州各地、九州島各地、列島各地(南西諸島を含む)との間の人・物の流
れを明らかにする。
- ④ 万之瀬川下流地域を基点として、地域の視点から対外交流を考える。

⑤中世日本国の北（「東」）の周縁部であった東北地方との比較研究を行う。

以上に基づいた、本研究の内容は次の通りである。

序章

研究史を整理して、本研究の課題を設定した。

第一部 中世前期の万之瀬川下流地域

主として課題①について考察した。

第一章 中世前期南薩摩の湊・川・道

中世史料を基本としながら、近世の地誌、地籍図、地名等々も用いて中世前期万之瀬川下流地域の様相の復原を試みた。まず、当該期の万之瀬川河口が現在よりも約2キロ南にあったこと、持躰松遺跡周辺に大きな蛇行があったことを確認した。そして旧河口に外洋船も入る湊があったと考え、旧河口左岸の唐坊（現在は当房）を博多唐坊からの類推で、宋人居留地にして、この地域最大の交易拠点と位置づけた。次に領主居館、寺社、商人の集住地・市場の検出を試み、それぞれが川や道路で結ばれていたという像を描いた。

第二章 中世万之瀬川下流地域の様相について—近世絵図を手がかりとして—

江戸時代後半に作られたと考えられる「阿多郷絵図」（阿多郷は中世の阿多郡南方に相当）に検討を加え、中世の様相を遡及的に考察した。とくに絵図の「古田」という表記に注目し、中世史料とつきあわせながら、中世前期の田地とその開発のあり方について考えた。その結果、12世紀代に阿多忠景（阿多郡司、1160年ころ地域権力化した）によって浦之名村からつづく中津野村の谷が開発され、鮫島・二階堂氏という鎌倉幕府によって任じられた地頭が、沖積低地の開発に着手したことを推定した。

最後に、万之瀬川の流路変更以前の景観の名残が見られる「加世田・田布施境直川亀絵図」を紹介し、旧河口部がラグーン的な様相を呈していたと推断した。

第二部 中世前期南九州の港と唐坊

主として課題②③④について考察した。

第三章 中世前期南九州の港と宋人居留地に関する一試論

万之瀬川下流地域を基点としながら、南九州、九州全域、東アジアへと問題を広げた。

具体的には、第一にこの地域と国家・領主（阿多氏・鮫島氏・二階堂氏）との関係について再検討した。

第二に中世前期の南九州の港について、その役割や相互関係を検討した。「国際貿易港」として著名な坊津も俎上にのせ、中世前期像に疑問を呈した。

第三に、トウボウ地名を九州規模で検出する作業を行った。その結果、六ヶ所を確認し（博多を除く）、①河川の河口部や沿岸ないしは湾の一角といった海上・水上交通に便のある場所に立地していること、②輸入陶磁器の出土する遺跡を含んでいたり、近傍にそのような遺跡が存在したりするものが多いこと、③平氏との深い関わりをもち、関東御領・北条氏領となった場所があること、を指摘した。そして、これらのうち中世史料に所見のある南さつま市加世田、薩摩川内市、福岡県福津市津屋崎のトウボウに12世紀半ば以降、宋人居留地があったと考えられること、その他の中にも存在した可能性があることを主張した。

一方、従来からよく知られている九州の唐人町について、それらが戦国末期・近世初頭の所産で、唐坊とは段階を異にすることを指摘し、中・近世の九州において中国人を中心とする異国人が居留地を形

成するような動向が、大づかみにいって二度一唐坊が形成された中世前期と唐人町が作られた戦国末期・近世初頭であったということを述べた。

補論

第三章原論文発表以降の研究の進展について補足した。

第四章 唐坊再論

第三章初出時以降、博多以外の唐坊に研究者の関心が向けられ、様々な議論が交わされた。それを踏まえて、あらためて唐坊の研究史を振り返り、課題を整理した。また、第三章で不十分であった、九州内のトウボウ地名を遺す地域の現地調査結果を報告した。調査地は、福岡県福津市津屋崎唐防地、鹿児島県垂水市当房比良、同鹿児島市喜入町東方、長崎県松浦市大崎免東防、同長崎市矢上東望、同島原市口之津町町名東方である。

第五章 中世前期坊津像の形成と普及

第三章の補論として、“古代中世を通じた南九州随一の国際貿易港”という坊津像の形成と普及について検討した。その結果、まず18世紀半ばの薩摩藩記録所周辺において、かかる歴史像ができあがっていたことを明らかにした。同時にそのイメージを支える信頼すべき根拠が存在しないことも確認した。

近代以降では、旧制第七高等学校（鹿児島）の初代歴史担当教員であった藤田明が、中世前期（日宋貿易期）の坊津が国際貿易港であったというイメージを従来以上に強く押し出したことが重要で、それが学界レベルでは森克己らに継承され、概説書、教材、観光案内などを通じて鹿児島現地でも大きな影響力を持ったとした。

なお、いうまでもなく本章の目的は、坊津の歴史的な位置づけを引き下げようということにあるのではない。旧来の歴史像の成り立ちと問題点を冷静に把握した上で、新たな研究を進める上での土俵を整備することにある。

第三部 中世前期南薩摩の領主たち

主として課題②③について考察した。

第六章 薩摩国阿多郡地頭鮫島氏系譜考

鎌倉時代初期、阿多氏に代わって薩摩国阿多郡地頭に任じられた鮫島氏の系譜認識（自己認識、他者の認識）について検討した。

まず、駿河国出身で、本来は伊豆工藤氏の一流である鮫島氏が、室町時代の島津氏側の史料「山田聖栄自記」以来、阿多氏と同族と見なされ、また一般地頭・御家人とは区別された存在と見られていたことを確認した。次に鮫島・阿多氏同族説が生まれた背景として、鮫島氏が薩摩国の政治的・経済的拠点であった阿多郡支配を円滑に進める上で、在来領主をとりこむ必要があったこと、また積極的に阿多氏（とくに忠景）との関係をアピールしたことがあったとした。また、島津氏初代忠久＝源頼朝落胤説を主張し始めた島津氏が、頼朝の伯父で阿多忠景の婿でもあった源為朝を高く評価することになり、その結果、阿多氏と同族視された鮫島氏も別格扱いされることになったと推定した。そして、かかる言説には、島津家文書の建久3年（1192）10月22日「関東御教書」、建久8年（1197）12月3日「前右大将家政所下文」の室町時代なりの解釈が関わっていたとした。

第七章 二階堂氏の所領と海上交通

阿多北方地頭二階堂氏（常陸家・懐島家）の日本各地に散在する所領に検討を加え、列島内の交通・流通体系の中で、万之瀬川下流地域はどのように位置づけられるのかという課題に迫ろうとした。

その結果、二階堂氏の沿海所領、ことに安房国北郡、伊勢国益田荘、紀伊国南部荘、肥前国鏡社が海

上交通の拠点というに相応しい場所であったことが確認できた。また、瀬戸内海の海上勢力として著名な忽那氏とも特別な関係を持っていたことも指摘した。二階堂氏は、鎌倉にも拠点を有していたから、房総半島—鎌倉—東海地方—紀伊半島—瀬戸内海—北九州—南九州という海の道を描くことは可能であり、同氏がこれらルート of 支配と密接な関係をもっていたことを想定できるとした。

第四部 中世国家周縁地域の比較史

主として課題⑤について考察した。

第八章 中世日本の北と南

中世の東北と南九州とを比較するために、12世紀にそれぞれを活動の場とした地域権力である平泉藤原氏と阿多氏をとりあげ比較検討した。

第一に、アイヌ民族形成期にあった北海道、貝塚時代からグスク時代への移行と先島諸島を含めた文化的一体性が形成される時期にあった南西諸島、こうした世界と日本国との狭間にあって交易活動を統括し、自立性を高めたのが藤原氏と阿多氏であると指摘した。

第二に、日本中世国家の国家周縁地域への対応を比較し、院政権と平氏は、北では平泉藤原氏の存続を認めつつ、特産物を獲得しようとし、一方南では、自立的勢力の存在を認めず、自ら直接の支配者として臨み、貿易等の利を得ようとしていたと結論づけた。しかし、鎌倉幕府が成立すると、全国的軍事政権の長である頼朝は、北の周縁部・境界領域に対しても直接に支配を及ぼすに至ったとした。

第三に、国家周縁部を支配した地域権力・領主の自己認識、あるいは彼らに対する他者からのまなざしに検討を加え、北の周縁地域の支配者は蝦夷の統率者と位置づけられ、それに照応する自己認識をもたされることになり、一方、南の周縁地域の支配者は、自己認識も他からの見方も日本国家内の一般的な領主と大差のないものであったと結論づけた。

第九章 東北と琉球弧—島尾敏雄「ヤポネシア論」の視界—

ヤポネシア論に見られる作家・島尾敏雄（1917—86）の列島史のとらえ方、地域と国家のとらえ方がきわめて先駆的であることを確認し、特に東北史の研究者が再評価すべきであることを述べた。歴史学の領域を超えて、国家周縁地域がどのように対象化されてきたかを探ろうとした試みである。

附論 モンゴル襲来と近代の地域社会—十五年戦争期の鹿児島県を事例として—

前章までとは素材を変えて、南九州の周縁性の問題を考えた。

鹿児島県入来地方では、現在でも入来院有重ら三兄弟に率いられた15歳から80歳の入来武士が、火艇を仕立ててモンゴル艦隊に突入し、全員戦死したという伝承が語り伝えられている。この話が、全国的に「弘安役六百五十年祭」が挙行された1931年、アジア太平洋戦争開戦期、その最末期を画期として、地域での顕彰運動、国民義勇隊の結成、特攻作戦などに関わりながら形作られ肥大化していったことを明らかにした。

鹿児島県はアジア太平洋戦争末期、「本土」の最西端に位置づけられ、沖縄特攻作戦および「本土決戦」の最前線とされた。この事例は、周縁ゆえの言説の変容のあり方を示しているといえることができるであろう。

終章

本研究の内容を総括し、今後の課題を示した。

以上、要すれば、第一部で中世前期万之瀬川下流地域の様相を具体的に復原し、それを出発点として第二部で、南九州、九州島、日本列島、東アジアへと視野を拡大しながら、海上交通、物流、人的交流の問題を考えた。また第三部では、万之瀬川下流地域の領主に焦点をあて、鯨島氏の検討からは、地域的特性が色濃く反映した系譜認識のあり方を見出し、二階堂氏の検討からは、全国に散在する所領群と海上交通路で結ばれた万之瀬川下流地域の位置を確認した。そして、第四部では、列島レベルで国家周縁地域を比較し、南九州と東北地方の類似点と相違点を浮かびあがらせた。万之瀬川下流地域を基点に据えて、そこから問題をおし拡げることで、一地域にとどまらない、列島・東アジアレベルでの海上交通、交易、対外交渉等々に対して新たな論点を提起したつもりである。

凡そ何処にフィールドを求めようと、地域史研究が当該地域で完結することはありえない。一つの地域に深く沈潜することで、かえってその地域と他の地域とのつながりが見えてくるはずである。その広がり、列島レベルとなり、やがて「国境」を超えて、東アジア規模のものとなる。本研究が中世地域史研究のモデルケースたり得ているとすれば幸いである。

論文審査結果の要旨

本論文は、日本中世国家の南の周縁地域に位置する鹿児島県万之瀬川下流地域の中世前期（平安時代後半～鎌倉時代）の地域史の解明を出発点として、この時代における日本列島、東アジア規模での海上交通・物流・人的交流、さらに南と北の周縁地域の共通点と相違点について解明したものである。全体は、本論の4部9章、付論1章と、序章・終章からなる。

序章では、研究史を整理し研究視角と課題を設定する。

第1部「中世前期の万之瀬川下流地域」は2章からなり、大量の中国陶磁器が出土した持躰松遺跡の考古学的成果をもとに日本史学・歴史地理学的方法によって、中世前期の万之瀬川下流地域について、唐坊（宋人居留地・交易拠点）、領主居館、寺社、市場、河口港と川と道路の交通などの地域構造を復原し、さらにこの時代の領主によるこの地域の開発について解明した。

第2部「中世前期南九州の港と唐坊」は3章からなり、万之瀬川下流地域を基点として、「トウボウ（唐坊）」地名の検討から、中世前期における九州各地の唐坊の存在を明らかにした。

第3部「中世前期南薩摩の領主たち」は2章からなり、鎌倉時代に万之瀬川下流地域の地頭であった鯨島氏の系譜意識、同じく地頭の二階堂氏が、その所領分布から南九州から房総半島に至る海上交通の支配に関係することを明らかにした。

第4部「中世国家周縁地域の比較史」は2章と付論1章からなり、12世紀の南と北の周縁地域の地域権力である阿多氏と平泉藤原氏を比較して、2つの周縁地域の共通点と相違点を明らかにした。

終章では本研究の意義と今後の課題を明らかにした。

本論文は、方法的には持躰松遺跡の考古学の成果を基盤として、中世史料に基づく歴史学的方法と、地名や古地図に基づく歴史地理学的方法を駆使して、中世前期の万之瀬川下流地域の地域史の解明に成功し、さらにその一地域への深い沈潜によって問題をおし拡げて、一地域にとどまらない、日本列島、東アジア規模での海上交通・物流・人的交流について明らかにした。本研究は、新しく豊かな中世史像を提示し、その方法や視角は中世地域史研究のモデルとなるものであり、斯界の学問的発展に大きく寄与するものである。

よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。